

---

# なんでこんなことになった？

ケン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なんでこんなことになった？

### 【Nコード】

N2639Y

### 【作者名】

ケン

### 【あらすじ】

平凡な学生はなぜか大人気ゲームの女主角の姿に変身

これから待ち受けていることに立ち向かうお話です

第一話 「ゲームと体の異変」 (前書き)

更新は、遅いです

イラストは載せれたら載せます

## 第一話 「ゲームと体の異変」

いつも通りの生活をしている青年は、さだきよへい狭田恭平17歳

普通の高校に通うクールな青年だ

いつも通り学校に行き帰り、アニメを見てゲームをするといった

だらけた生活をしている彼の身にある日突然……

「ああー今日も疲れたな おっともつこんな時間ゲームでもしてから寝るか」

「おい遅かったな、先にプレイしてるぞ」

「主人公が遅れてどうするのよ」笑

そう言っているのは彼の親友の原田理欧と

幼馴染の蓬田悠里だ

彼が今やり始めたゲームは、某ゲーム会社が発売した大人気RPGの

Those who travel in the time  
この時を旅する者たち

というゲームだ

このゲームは3Dグラフィックを使用した最新のゲームで

主人公が珍しく女性である

ほかにもサブキャラ視点プレイというものがあり、主人公じゃないサブキャラでプレイする事もできる。

ゲーム主人公

神木シルディア香菜

愛称 香菜、シルディア、シャル

身長168cm

プレイヤー 狭田恭平

サブキャラ

白上聡史

愛称 聡史

身長 175cm

プレイヤー 原田理欧

アリサ・フェルトン

愛称 アリサ、リサ

身長 160cm

プレイヤー 蓬田悠里

最新のグラフィックにより髪の毛の1本1本や影、顔の表情、動作、周りの木々

建物、その他の動物や乗り物などの動きなどがすごくリアルである

やはり主人公は美人でナイスバディである

サブキャラもイケメンやスタイル抜群ばかりだな

種類によっては、筋肉や脂肪の量が違う

ただ他のゲームと違う所は、いきなり冒険ではなく

この世に生を受けたところからはじまるのだ

旅に出る時期などは、自由に変えられるし仲間も自由に選べる

成長速度は、人によってまちまちで、上がる人は上がるし、上がらない人は上がらない

といった少し変わったRPGである。

主人公が女性なため、幼馴染がやればいいじゃんと言ったのに

あんたはゲームが一番得意だからあんたが主人公でいいよね

じゃあ理欧がやればいいじゃん

いやだね俺は付き人きやらでいいよ

とか言って結局俺が主人公に・・・



「やっと俺らの年齢まで来たか・」

「長かったね」

「はじめて始めた時から1年半くらいたったからね」

「えっ！もうそんなにたつの？」

「うんそーだけど、しらなっただの？」

マジでそんなにたっていた

発売されたのが去年の4月・・・今は9月だから約1年半だ  
長かったこの年まで育成するのが

その夜、俺は夢を見た・・・ここまでの主人公視点での成長を

そして翌日、俺の体に異変が起きていた（汗）

「な、な、なんで女になってるのおお~~~~~???」

そこには付いているはずのない胸がしかも巨乳、したのも消えている  
とりあえず落ち着くぞ

「まずは鏡を見てみるぞ、ブスか美人か出来れば美人がいいなあ」

「って、くそ美人じゃんでもどっかで見た事があるんだよなあ・・・

てか思い出したなんでシルディアになってるの?？」

どろしよびどろしよび

授業もあるし、ましてや人気ゲームの主人公になっちゃったなんて  
信じてもらえないよな

まずは、幼馴染と親友に電話だ

「もしもし」

「もしもし、誰？」

「悠里か？ 俺だ恭平だよ」

「ハア？ 本当に恭平なの？ その声どうしたの？」

「とりあえずうちに来てくれ、事情は話す・・・出来たら理欧にも伝えてくれないか」

「うん、わかった それじゃあね」

はあ？　まずは着替えるか

でもどうしようブラとかないし、しょうがないから

そのまま着ようかな

胸の部分がきつすぎる　ズボンもなんかきついし

我慢するか

ピンポーン

「来たよ〜きよ〜へい　あ〜け〜て〜」

「まって今あける」

ガチャ

「……………も、もしかして、きよ、恭平？」　ポ  
カーン

「うん そつですよ 俺です」

「なんで女!?!」

「俺もわかんないんだよ

とりあえず上がって」

「ううー」「ジイー」

「な、なに!?!」「ポヨン」

「な、なんで私よりもおっぱいが大きいのよ（怒）」

「しっ、しらないよ」

「うーもつつ頭に來たからあなたのそのでかい乳、特別に揉みしだいてあげるわ」ニター

モミモミ

「や、やめ・・・あんっ!」

「ほれほれ」モミモミクリクリ

モミモミ

「あ、グスツ・・・もうやめ・・・てよ

「あ、ごごめん・じょ」冗談だって・・・ね「オロオロ

「ヒック、う、うんわかった。幼なじみだから特別に許してあげる」

「ほんとう！？あ、ありがとう！..」



「もういいか？」

朝から俺には刺激が強過ぎる  
「

「あっ！…！う、うん　　いいよ  
「

「それにしても、どこかで見た気がするなあ、あっ！…！」

「ああ、うんうん　　そーだそーだよ　　うんうん  
「

「なあ恭平なんか悠里が自分の世界に入ってるんっすけど」

「気にすんないつもの事だから」

「その姿はゲームのシャルだっ!!」

「そんなの一目見たときから知っていますけど・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「わ、わたしだってわかってたわよ  
それにしてもこれからどうすんの?」

「そっ!?!それなんだよ・・・ほんとうっ!?!」

「突然の女体化なんて信じられるわけないし」

「うん、だから困ってるの・・・学校とか」

「うっっんそうだな」

「うっっんそうだな」

「このうのはどーかしら、恭平は家庭の事情で転校することになった」

親に事情を話し養子または、戸籍を女に変える

新しく転校してきたということにして、学校に戻るとか」

「うーん・・・・・・・・」

そうするしかないかもね、2人ともありがとう　でも今日は休むね学校

その間に親と話をつけておく」

その後、親に電話を誰だお前といろいろ疑われたので

家族しか100%知らない秘密を話しどーにか納得してもらった

あすは家に帰ることになった

## 第二話 「平穩な生活はないわけで」 (前書き)

ということで軽く人物紹介

狭田恭平さだ きょうへい

高校2年生 17歳

身長 178cm

クールでかつこいい

クラスの女子たちからも人気があり、実は幼馴染も彼のことが好きであるが  
鈍感で意外と恥ずかしがり屋なため幼馴染と両思いだが告白できないでいる

狭田香菜さだ かな

高校2年生

身長 168cm

かなりの美人

このキャラはもちろん恭平の女体化後のキャラだ

元はゲームの主人公で、特に男性から絶大な人気を誇っている

あいだ ゆうり  
蓬田悠里

高校2年生

身長 155cm

美人というよりかわいい系

恭平とは、幼馴染で大の親友、実は今日への一番のよき理解者である  
恭平へ淡い恋心を抱いているが鈍感なのかきずかない!?

はらだ りあう  
原田理欧

高校2年生

身長 172cm

かなり普通の学生、恭平とは中学で意気投合  
そこから大の親友である

とこんな感じです

## 第二話 「平穏な生活はないわけで」

さて幼馴染や親友に言われた通り次の日は家庭の事情

ということ、学校を休み実家にこれから帰省をするところなのだが服や下着は、幼馴染に買ってきてもらった服を着るのだが……

「なあんだあこれ……????」

なんとそこには、いまどきの女の子が着る胸元の大きくあいた服と

軽く上に羽織るための、カーディガンそして

フリフリのミニスカートに極めつけは、ニーハイソックス

マジでこれを着るのか、いくら心まで女っぽくなったといえ

元は男だし、ここまで短いスカートは自分が女だったとしても  
たぶん履かなかったと思う

そんな事を思っけていてもはじまらないか

早く着替えていこうと

ガチャ

「ふうー、それにしても幼馴染はなんでこんな格好をさせたんだ？」



「まつ、いいか」

はあそういうえば、駅まで遠いんだよな

20分普段ならそんなにも気にならないが今日は違う

なぜなら女になってしまい恰好は

ミニスカにニーハイ、胸を強調する大きく開いた服にカーディガン

周りの視線がイタイ

何にもなく駅まで着きますように???

だがその願いはかなえられない

「ねえキミ、かわいいねよかったらその喫茶店でお茶しない？」

ゲツ ナンパかよ

「すみません・・・この後用事があったて急いでいるので、ごめんなさい」

タタッ ガシッ

「ひあっ？」

「ねっ？ ほんの少し10分だけでいいから」

なんとナンパ男たちは、先を急ごうとする俺の腕を  
掴んできたのだ

「ほんとに急いでるんです？ 放してくださいっ（怒）」

「しょうがないな、じゃあメアドくらい教えてくれたら考えてあげるよ」「ニヤッ

きもちわりー早く逃げていきたいよ（泣）

ナンパされる女の気持ちがわかったよ

「あのそんな気はさらさらないんで さよならっ」 バアッ  
タッタッタ

「あっ？ 待ってよ〜」

「ハアーハアー なんとか ハッ 逃げ切った」

ああーあ 本当にめんどくさかった

あんなことがこれからも起きたらたまんねえーよ

そんなことを考えて木陰のベンチに座って居ると

またしてしても違う男が声をかけてきた

「おおっ キミ美人だねー スタイルもいいし 俺の彼女になら・・・」

「おとわりですっ????」 ダッシユ

もういい加減疲れたわ

もう勘弁、んっ? なんかまた人が来た今度は違う感じだ

「キミ少しだけここでいいからお話聞いてくれないかな？」

まあ話だけならいいか

「実は私いろいろものごとでして」

えっ ファントムプロダクション!?

これ一流の芸能事務所じゃん

「実は、君をモデルとしてスカウトしたいんだ」

えっ!?! 今何て

「キミは、顔立ちも綺麗だしスタイルもいいし絶対にモデルに向いているんだよ

でもどこかで見たとある顔なんだよなあー っうゝん」

「あの、ちょっといいですか？」

「ううん、あっはい……いいですよ」

「今は。急いでいるので保留にしていただけないでしょうか？」

「ううーん仕方がありませんね……いいですよ」

そのかわり後でこの番号に電話してくださいね」



「それじゃあ失礼します」

「電話のほうよろしくね」

ハアアアどうしよう・・・家に帰ったら悠里にでも相談するか

やっとのことで駅に着いた恭平は、時計を見て驚く

いつもの3倍以上時間がかかってるじゃん

そして実家まで帰るために、電車に乗っている

いろんなところから視線やヒソヒソ話がきこえる

「ねえあの子可愛くない？」

「綺麗な子だね」

「なんかどっかで見たことない？」

「あっ ゲームで見たことない？」

などなど……もちろんガン無視&気にしない

こんなこといちいち気にしていたらきりがないのだ

そして実家前

ピンポン

「はい どちらをままでしょうか」

「あのかあさん 恭平だけどあけてくれない？」

「えっ 恭平 うんわかった」

ガチャ

「ただいまかあさん」

「ほんとに恭平なの、悠里ちゃんや理欧くんにも聞いていたけど  
こんな美人になっているとわきいて居ないわ？」

なんでうちのかあさんは、テンションが上がってるの

ねえ みんななんで？

「まあ、いいわ 上がってちょーだい」

「さし」

## 第二話 「平穏な生活はないわけで」(後書き)

作者 「親が寝たすきにやっと投稿できました」

恭平 「こんなことやっけていいのかよ、次赤点だったら留年でしょ(笑)」

作者 「……………」

悠里 「ちよつと恭平作者であるケンさんをいじめないの」

理欧 「でも恭平は事実しか述べてないよね」

悠里 「ちよつと二人ともそういうことは言わないの

「ごめんなさいね、変わりに私が謝るのでッてダイジョウブですか?」

作者 「……………」ガーン 激落ち込み

恭平 「まあこんな奴はほおっておこうぜ?」

悠里 「そんなこと言わないの!では次回予告は、ついに親との話し合いをして

学園デビューによる大波乱かな(笑)」

恭平 「もう 勘弁してくれよ~~~~~」



第三話 「実家と家族と話し合い」 前編（前書き）

テスト期間に突入です

後編の更新は、テスト後かも



第三話 「実家と家族と話し合い」 前編

久しぶりの家だやっぱり落ち着くな

「そーいえば有希と涼輔は、って今は学校の時間だったね

「そーよ あなたは欠席してまで帰省してるんだからね（笑）」

「あははっ……っとその前に聞きたいことが」

「なにかしら？」

「このことは、家族全員知ってるってことでいいんだよね！」

「うんそうだけど・・・いつ帰ってくるかは、みんなには内緒にしといたわｗｗｗｗ」

「ｗｗｗｗｗｗじゃねえよ、ちゃんと伝えとけよ？」

「コブっ??」

女の子がそんな言葉遣いをしないの(怒)「

「ピッ……ハ、はい(めんなさい)」

「一応みんなには話してあるし、お父さんの納得してくれているから

後は、顔合わせだけだから今日1日で終わるわ

だからそれまで好きにしていなさい……あなたの部屋もそのまま  
だから「

「わかった。

部屋にいるね」

「わかったわ。

何か聞きたいことがあったら呼んでね

何もなければ、ご飯が出来たら呼ぶわね」

そういえば、こんな名刺をもらったんだっ

今はうちの学校は、少し大きな休憩の時間だったと思うから

悠里に電話でもしてみるか……

プ、プ、プ……プルルルル……プルルル

「…のたごじい…さじ」

「もしもし恭平だけど…」

「もしもし？」

「いやー実はさ、今日実家に帰るときにフアントムプロの人に会ってさ」

「えっマジで!？」

「なんでなんで?」

「うん、それでモデルをやらなかったってスカウトされたんだけど・・・」





「それは、恭平の親に言ったの？」

「いや、ただただけど……まずは幼馴染の悠里に聞いたほうが  
いかなって思ったから」

「それは嬉しいことね。 私ならやっちゃんなよだけど

恭平の親にも聞いてみないとね」

「うん、 わかったきいてみるよ・・・うんじゃーね」

ガチャ

「ねえ かあさん」

「あら、どうしたの恭平？」

「いや実はね……………コミュニケーションモデルの権について」

「ええっ！・・・でもしょうがないかな、今の姿ならだれもが嫉妬する

くらいの美貌とプロポーションだものね」ルンルン

「ねえなんでそんなにノリノリなの（苦笑）」

「だって面白そうじゃないモデルとか、やっちゃんなのよ」

「軽い感じだな、戸籍を女に変えたら考えるよ」

「あら、検討してくれるのやったー??」

でも、戸籍の性別変更は難しいのよ・・・裁判所や医者なんかがあるって」

「でも、こんな姿で戸籍が男じゃ困るよ」

「まあ、まずは一ヶ月は休みなさい」

「ええ~~~~~」  
「一ヶ月?????」

第四話 「実家と家族と話し合い」 後編

ということでした。ただいま母は、学校へ電話中

これから一か月俺はどっしりよう

遊び三昧?・・・いやいやその間にも学校は、進んでいる

悠里にでも勉強を教えてもらうか・・・でもいちいち通ってもらうのは悪いし

俺から通うか・・・まアしょうがないな、ナンパは我慢だ

「ただいまー?」



おっこの声は有希かな・・・

「おかえり有希」

「えっ、ど、どちさま様ですか？」

「グサッ・・・ウツ・・・今のは心に響くぞ妹よ・・・」

いきなりどちらさまなんて……

お兄ちゃん泣いちゃうぞ(笑)

「妹よって……だれ? ……恭平にいは男だし……」

「そのことについては、私から説明してあげる」「フフッ

なんなんだよ最後のフフッて……」

「実は恭平は………性転換手術をしました……」

「ええー—————」  
「ちげえ—————」  
「」

「フフツ  
W  
W  
W  
W  
W  
W  
W  
」  
母、爆笑中

「恭平にいの心が女の子だったなんて知らなかった」ニヤッ

「性転換じゃなくて、朝起きてたらこうなっただけなんだからな  
そして最後の不敵な笑みはなんだ？」

「お兄ちゃん超人でかわいいし、実は私女の子もアリだったりし  
て」じゅるり

なんかあやしい感じに、というかなぜ妹よここまで寄ってくる  
まさか俺、襲われるのか？・・・いやだ怖い怖い・・・ヤメテ

「・・・・・・・・かわいい・・・・・・・・ニヤッ・・・・・・・・食べちゃおうかな」「ニ」「ニ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」ガクブルガクブル

あ、足が動かないどうして・・・・・・・・怖いヤメテ

「こんなに怯えちゃって・・・かわいいなあ～～～」

「もうやめて・・・グスツ・・・何かしたなら謝るから・・・」

ヒック・・・うう・・・本当に怖い・・・」ガタガタ

「やだなあ～大好きなのにこんなに可愛い子になって

私が襲わないと思う？・・・ホラ泣かないのかわいい顔が台無し」  
又ギッ

そういえば妹は軽く百合の方向性があるんだった（泣）

本当に怖い・・・これが襲われる女の子の気持ちなんだろうか？

誰か助けてえ

しかも下着姿になってるし・・・

てかその前にうちの家族おかしなやつばっかじゃん



「ハアハア、おねえちゃんカワイイよ」ハアハア

えっ今なんと・・・おねえちゃん？

やばい妹の理性が完全に百合に入ってる

お母さんに助けを・・・・・・って

なんでそこで見てるの~~~~~  
(泣)

「ニヤニヤ・・・そろそろ助けてあげようかね」  
母

ガシッ

「ホラ恭平！　今のうちに部屋にでも逃げな

あんたの、処女が妹の手で奪われないためにもね（笑）」

「あ、ありがとうかあさん」

「はなしなさいよ~~~~~」  
「バタバタ

早く逃げよう

あつ、あれ？・・・足がうまく動かない

「早く部屋に行きなさいって

「足が石みたいに動かないの・・・」

「ただいま」

「アレこちらの美人はどちらさん？・・・それになんでユウねえ下着姿？」

「なんでユウねえをお母さんが取り押さえてるの？」

「それより涼輔、いま有希が百合モード突入中なの

そこに居る子はあんたの兄で恭平……なぜか女になっちゃって  
それを見た有希が、百合モード突入で襲われかけて、恐怖で足がす  
くんじゃってるの

いろいろと原因を探るために帰省中だから部屋まで連れて行ってあ  
げて」

「うんわかった・・リヨ かいです」

「しめんね涼輔」

うわっにーちゃんいやいや今は、ねーちゃんかな

めっちゃ美人じゃんてかシルディアそっくりだし

こんなねーちゃんにいたずらされてみたいかな

」……」  
弟、妄想中

「ねっ……ねえ、悪いけど部屋に戻るの手伝ってもらっていい？」

やばいめっちゃカワイイ……マジタイプどストライク

「うん、もちろんいいよ」トヨイッ

「ちよっ、なにするの……バタバタ」カー

ねーちゃん顔真っ赤だ……ニヤニヤ……マジカワイイ  
からかっちゃんおっかな

「ふぶっ・・・ねーちゃん顔真っ赤」ニタニタ

「うっ・・・な、何言ってるの・・・赤くないよ」

もうねーちゃんできていいや



「ハイ着いたよ」ポス

「あ、ありがとう」顔真っ赤

あれなんで弟相手にこんなに顔が熱いんだろう

お姫様だっこのせい？・・・それとも涼輔のことが・・・カー

もしかして心も女に？

そして今までの経緯を話した

そして弟には、心が落ち着くまで部屋で話し相手になってもらったが  
なんか弟が、よそよそしいかも

「じはんができたわよ」

「ねーちゃんじはんだったっ〜」

「うん、いつか」

食卓に行くところには、お父さんが……

「よう恭平、久しぶりだなあさんに聞いたぞ」

「あ、」

「おまえなんかゲームおキャラクターに似ているような？」

「うんあのRPGの香葉にそっくりだよ」

「じゃあきまりだな」「ニコッ」

な、何が決まりなんですか？

「おまえのこれからの名前は、香菜だな」

ええ~~~~~名前変えるの？

「名前は変えないとだめなの？」

「戸籍を変えるんだからな？・・・あとゲームのキャラそっくりだから香菜ね」

ハハツ・・・そんな簡単な理由で

なんかうちの家族ってやっぱりおかしいかも・・・

第五話 「女としてのしつけと電車での恐怖」 (前書き)

今回は少しシリアスかも・・・



第五話 「女としてのしつけと電車での恐怖」

なんだかんだ言っつて、変な家族でも

久々の実家はとても安らぎ、心の休養になる……

おっともうこんな時間……お風呂でも入るか……

「かあさんお風呂入りたいんだけど……先にいいかな？」

「別にいいわよ……久しぶりの実家だし

今日一日何かとバタバタと忙しかったし……ゆっくり入りなさい」  
ニコ

「ありがとう……タオルとかはどうすればいい？」

「今は手が離せないけど、後で用意するから先に入ってください」

やっぱり実家は落ち着く

狭いアパートでひとり暮らしをするよりも・楽しいし

何よりこう言った何気ない会話のありがたみは、家を出てから気付

くもんだ？

「アレー？おねえちゃんこれからお風呂？」「ニタッ

「うんそーだけど一緒に入るのはダメだからね？」「ヒヤヒヤ

「うん了解・・・知ってるよ・・・じゃあね」「ニッコ

あれ？・・・いやでも入るとか

何か言うのかと思いきや意外とあっさり・・・助かったあ

のちに香菜が入浴中に乱入してくるとは、気を抜きすぎて居た

「今日は疲れたからもおく寝る？」

翌朝、いつもどおり過ごしていたら母が一言・・・

「ねえその言葉使いどうにもならないの？・・・前にも注意したで  
しょ？」

女の子が俺とか男口調はいけないって「

「いいじゃんうちなんだし  
「

「外で猫を被っていても、いつボロが出るかわからないじゃない？  
よしわかったわ・・・今日から一カ月私が女の子としての指導をし  
てあげる」

ということがあり、かなりスパルタだった

言葉使いを間違えれば説教または暴力・・・どこの国ですかここは？

世界一安全な国日本じゃないんですかあ~~~~~？

「今日で指導は終わりよ……よくがんばったわね」「ニッコ

「うん頑張ったよ……まさかここまで話し方まで自然になるなんて

私も思わなかったよ……これで平気ね」

「うんそうよ本当に早かったわね……ついに明後日は学園デビュー  
よ」

「うんそーなんだよなだから明日の朝には帰らないと

またつまらなくなるな やっぱり実家はいいね」

といつこと実家を出て駅まで送ってもらった私はというと

平日の朝の通勤電車の中で・・・ただいま痴漢にあっています（泣）

「うっっ・・・うん・・・あっ」サワサワ



すごく気持ち悪いし怖い

警察の特集番組で痴漢逮捕に瞬間とかやっついて

いつも女性は何も言わなくて、後で警察に犯人を捕まえられるということばかりで

なぜ反抗しないんだろうと疑問だったが・・・理由がよくわかった

足がすくんで動かない・・・

体が棒みたいに固まってしまっただ

最初はスカートの上だったが次第にエスカレーターし

今では、胸もいじられている

「あつダメ・・・そこだけは」

なんとパンツの中に手を入れてきたのだ

こわい・・・こわすぎるよ・・・うう、誰か助けて・・・

「うう・・・グスッ・・・もうほんとにやめてください」

すると痴漢男がこんなことをささやいてきたのだ

「こんなに股を濡れしておきながら本当は気持ちがいいんだろ」「ニ  
ヤニヤ

私は背筋に寒気が走った

早く終われ早く終われ早く終われ早く終われ早くお……………

「口では拒否をしても、体は素直だな」「ニヤッ

クチユクチユクチユ

ダメ、こんなのに感じたくないのに

声が出ちゃいそう・・・私男から女になってこんな快感知ったら

おかしくなりそお・・・いや絶対おかしくなっちゃう

「ハアア・・・ハア・・・ンっ・・・ハア」

「いい体だったぜ」

男はそういうと静かにひとこみとともに消えていった

私は怖かった・・・それからも恐怖が続いた

私は許せなかった一瞬でも痴漢されて、気持ちいいと感じてしまった自分が

このことはだれにも話せない・・・心の傷になった・・・

内に帰ると香菜は倒れこむようにして

その意識を夢の世界へと飛ばした

その日の午後に家のチャイムが鳴った

ピンポーン

「はーい、どなたですか？」ガチャ

「いやあー久しぶりだな恭平？」

「あつ・・・なんだ理欧か・・・」

「おっ、おいどーしたんだよその顔とテンション初めて女体化した時の恭平と全然違うじゃん」

「・・・上がったよ」



それから私は、なぜこんなに元気がないのか聞かれたのですべてを話した

私が痴漢にあったこと・・・名前が恭平からかなえ変わったこと

なぜこんなしゃべり方に変わったかなどなど

少しは、気持ちも落ち着いたし明日の準備は万端だから

今日は帰ってもらい、代わりに悠里に事情を話し一晩泊ってもらった

悠里は、思い出して泣き出してしまった私をそっと包んでくれた

私はあらためて思った・・・心や体が女に変わってしまっても

まだ悠里のことが好きだということ・・・

第六話 「学園デビュー 私の名前は狭田香菜」 (前書き)

じつは学園デビュー

## 第六話 「学園デビュー 私の名前は狭田香菜」

ということで今日は、恭平改め香菜ちゃんの学園デビュー前日です？

ということでしたいま香菜のうちにいる私悠里ですが

な、なんと私のいとしの香菜が痴漢にあったということなのです  
(怒)

そのせいで香菜の心に大きな傷が出来ました許せません

デスが家で静かにしていても仕方がないということだ

今日は、二人でお出かけすることに決定

「いやなことを忘れるためには、やっぱりはじけ飛ぶことですよ？」

「うん・・・それもそうだよね・・・これからもあるかもしれない  
いし

・・・こんなことでクヨクヨしてられないのかもね」

「おっ？・・・さすが香菜だね相変わらずサバサバした性格う？」

とらいつとで今日は、遊園地に行きます？」

「やったーこらって絶叫マシンがいっぱいあるじゃん

私こら言ったのだいすきなのお」ワクワク

今日は香菜を遊園地に連れていくことで

昨日のことは立ち直ってくれたように見えたので、一応大成功だ???

「ねえねえ香菜あ??」

「なに悠里？」

「明日の登校ってどうするの？　一緒に行ってもいいの？」

「たぶんやめたほうがいいと思う、転校してくる前に  
転校生と一緒に学校に登校してるの？ってなる思っから・・・」

「ああ〜〜、それもそうだね」

そつえば私何か悠里に相談したいものを忘れて居る気が・・・

「あっ……そういえば名刺」

「へっ……何が名刺なの？」

「ホラこの前電話で話した、モデルについてよ……」



「あゝああ、その話ねやつちやいなさいよ

あんたチヨ一きれいでスタイル抜群だからすぐトップよ？」

「その件なんだけど、一人じゃ心細いから

悠里も一緒にやってくれるなら……. やってもいいかなって」

「うんうんって……ええー……無理無理

私じゃ不釣り合い……無理無理」

などとかかなり盛り上がった

明日はついに学園デビューだ……かなりの緊張

期待と少しの不安、それからは特にないかな

せっかくだから悠里とは、知り合いということにしてもらって

明日から一緒に登校しようって……

「今日は遅いから寝よう……」

「おやすみ悠里」

「おやすみ香菜」

今日は学園デビューの朝

着方がわからない女子の制服に少し戸惑う私に

悠里が見本を見せながら制服を着てくれたのでその通りに着てみたら案外簡単

デザインがかわいいので個人的にお気に入り

私は胸が大きいので少し特注・いやオーダーメイドかな（笑）

「じゃあ、いっつか学校へ」

「うん・・・でも少し緊張するな

まさか女の子になって学校に登校することになるとは思わなかった  
も」

「わかるわあ～～その気持ち

わたしもまさか幼馴染が女体化するなんて夢にも思わなかったよ」

やっぱり久しぶりの登校は、楽しいな

やっぱり悠里といると心が安らぐし

学校に着くと悠里は教室へ、私は職員室へ行くためいったんバイバイ

少し職員室あで行くのに周りの視線が気になったが無視つと

職員室へと到着

コンコン  
ガラガラガラガラ

「失礼します、転校をしてきた狭田香菜と申しますが

あまの  
りゅうじ  
天野龍慈先生はいらっしやいますか？」

「はい、私です。」

とりあえず中に入ってきなさい・・・椅子は用意するから」

「はい・・・失礼します」

「ええ、と何かから話そうかな?」「うん



「あの？」

「な、なんだい？」

「実はこの学校に通う蓬田悠里さんとは友達なんです  
だから同じクラスかどうか見ていただけませんか？」

「ああそうなんだ

それならどうかな？・・・確か蓬田は・・・

おおっ・・・キミと同じで三組だ？」

やったーよかったー

これでまた悠里と同じだ・・・これで席が近ければ話せるぞ

「っと、もうこんな時間だから君を3組の先生に

任せるから後のことは、彼女に聞くように

お、い、美都先生この子を頼みます」

「はいわかりました……よろしくね」「ニ」ッ

「よろしくお願いします

えっと私は、狭田香菜と言いますこれからよろしくお願いします」

「あら……ずいぶんかじりまっているのね

私は美都響子よ、よろしくね」

もうすぐ教室だ……みんなどんな反応をするのだろう

まさに僕の容赦は、あの人気ゲームの主人公なんだからな

「狭田さん、もうすぐ教室です……心の準備は……？」

「OKです。　どうですか？」

「それじゃあ私が入ってと言つまで廊下で待っててね」

ガラガラ

「それじゃあ朝の挨拶」キリッ

うわぁ　人が変わったよ先生

裏ではこんなテンションだったんだって初めて知ったし  
教室の感じのほうが見慣れているけどね

「それでは朝の連絡を言う前に皆さんにお知らせがあります」

「ええーなになに」

「もしかして結婚？」

ワイワイガヤガヤ

「ええーと今日は、クラス仲間が一人増えます。」

「女子？男子？どっち」

「勿論女だ」

「何言ってるのよ男よ」

「美人がいいなあ」

「はあ〜さわやかなイケメンがいいわ」

「はいはい静かに・・・それじゃあ入ってきて」

ガラガラ



シーン

「えつと今日から新しく転校してきました狭田香菜です。

えといろいろとわからないことがあると思いますのでよろしくお願  
いします

あとみんな仲良くしていただけると嬉しいなあと思います」「ニコッ

つと自己紹介がおつた瞬間教室は大騒ぎ

えっなぜかって？・・・それは俺の姿がシャルそのものなのと

かなりの美人でその凛とした姿から男子だけではなく、女子からも  
人気に

休憩時間はもう大変・・・とにかく質問質問質問

たとえば顔立ちがハーフっぽいけどどことのハーフなの

彼氏はあるの？ 名前が狭田だけど恭平と関係あるの？ どこから  
来たのかなどなど

もう疲れた・・・

一番びっくりだったのは、初日に告白されたこと

勿論答えはNO、まだあつたばつかでお互いをよく知らないからだ

でもなんだかんだ言いながらも充実した一日ではあつた・・・

第七話 「香菜は人気者!？」（前書き）

やっとレポートが描き終わったと思ったら

今週の木曜日からテストスタート（泣）

第七話 「香菜は人気者!？」

学園デビューからもう一カ月

相変わらず男子からの告白は多い

特に困っているのは、同学年だけではなく上下級生からもあるのだ

なかには特殊な子もいるし百合やキモいのもいる

それになぜか転校をして一週間もしないうちに

この学校で私を知らぬ者はいなくなったのだ

えっ・・・なぜって・・・それは、私が悠里と一緒に雑誌に載ったから

えっ?・・・何の話って

前に実家に帰るときに、声をかけられたじゃない

答えにOKの返事をしたの・・・そしたらこのありさま

きゃあー香菜さん？ 俺と付き合って〜

ワイワイガヤガヤ

すると一人の少女がこちらえ歩み寄ってきた・

「あの私、1年の神田沙紀かんだ さきって言います」

「うん、でなにかおっなの？」

「今度、狭田さんのファンクラブの触れ合い企画見たいのをやりたいので

出ていただけないかなっと思って・・・」

ええっ？ 私にファンクラブがあるの？

しらんかったわ〜

どうしようもそれならこじこじしてみよう

これから絶対に普通の学生生活に戻れるように条件を付けてみる事

にしようかな

「別にいいわよ・・・でも一つ条件があるかな」

「なんですか？その条件は」



「いいじゃあ言うつわよ・・・定期的に集会を開いてあげるから

私にべたべたひっ付いてこないということを約束させるなら出てもいいわ」

「了解です。がんばります」

しかし今の子気合入ってたなあ〜

なにをそこまでさわぐかねえ〜、わたしには、わからんわからん

そして集会当日

「ええ本日は、狭田香菜ファンクラブの集会にお集まりいただき誠にありがとうございます。

本日司会進行をさせていただきます、神田沙紀です

どうかよろしくお願いします」

ふお〜などと盛り上がっている

なんか出ていく気が失せるようなテンションの高さだ

いやだな

「この集会を開くにつれて、狭田さんより一つ条件を出されました

それは、普段は普通の女子高生として過ごしたいから

あまりうるさくしないで、普通に接してきてということだそうです

みなさんいいですね

一同 はあゝい

「それでは本日のメインに出ていただきましょう狭田香菜さんです」  
「？」

「ええ」と、私にもうすであつたことある人いると思うけど

一応自己紹介のほうを、狭田香菜です

先月に転校してきたばかりです

基本的に集会は、質問タイムにしたいので質問がある方はどうぞ

するとかなりの人数当てを挙げた

なんか喧嘩が始まったり、人ごみで違う人が当たったと勘違いしたり  
もうグダグダ・・・わたしはかなり疲れた

だから寝る

ッと思ったけど予定は見ておかないとってあすは仕事じゃん？

大変用意をしなきゃ・・・やっぱり眠いから寝よう

第八話 「こんな日常だから疲れが・・・」 (前書き)

テストも終わりパソコンも復活

というところで再開です

第八話 「こんな日常だから疲れが・・・」

今日は悠里と共に学校帰りにやらなければいけないことがある

それは・・・雑誌に載せるための撮影だ

今回は夏物らしい、何を着るのかはまだ分からない

言うてからの楽しみなのだがこの後悠里の一言で私はどん底に・・・

「ねえ～ねえ～ゆづりい～今回は夏ものだつてえ～」

あっちなみになんでこんな口調かというと

意外とモデルの仕事が楽しくテンションが上がっているのと

大好きな悠里（別に百合ってわけではないぞ私が元男だから？）



と一緒に仕事をすることによって少しでも長くいられるからだ

「へえ〜そうなんだあ・・・じゃあ香菜の水着も見れるかも」ワクワク

「えっ？・・・み、水着・・・」

そつだ夏といえば水着だったんだあ~~~~~  
(泣)

「私は着なれているけど香菜は大丈夫なの？」

「ワ、ワタシハダイジョウブダヨ・・・ダダダ、ダッテ

オンナノコノベンキョウノトキニミズギモキサセラレタリシタカラネ

ハッ、ハハハハ、WWWWW「故障中

「わあっちよっ、香菜戻ってこい・・・カナ~~~~~」

しばらく他の世界へ飛んで行っていた香菜ちゃんも戻ってきたところでは再開by作者

「おいしい香菜、早く起きないから作者が出てきたぞ？」

「はっ、それだけは許さんどこだどこにいる」

「もう遅いよ……一言残して帰って行ったわ」クスクス

「あの野郎次に見つけたらマジで殴ってやるからな」怒

おおつと危ない危ない

様子を見に出てきたただけなのに、タイミングが遅れていたら

俺は殴られていたのか、セーフセーフ

「じゃあ、とにかく少し急ぐか、少し時間が迫ってきてるし・・・」

「って、本当にやばいじゃんと急ぐし」

数分後

「セーフ?・・・間に合ったあ」

「もつ?・・・香菜ったら足速すぎ?」

「そっかなあ?・・・普通だと思っけど」

「あんだ絶対、陸上部に入ったほうがいいと思っわ」

「足が太くなりそうだからやめとく」笑

「ふうん・・・まあいいわ、とにかく行く」

私はいつも思うのだが、意外とカメラマンのテンションが高いから

何回も撮影をしていたとしても

いつもこのテンションに付いていけるのかなあ？

なんて思ってしまうが意外とノリノリになれるから楽しい



「はいじゃあ次は香菜ちゃん一人で撮ってみよう」

パシヤ パシヤ

「じゃあ、手を腰に当ててみて」

パシヤ パシヤ

「香菜ちゃんは少しボーイッシュだから少し足を開いて立ってみようか」

悠里ちゃんは香菜ちゃんの腕に手を絡めてみよう」

などと、正直言って同じ場所で立ちっぱなしというのは

かなり疲れる・・・いつもふくらはぎがパンパンだ

「ねえ香菜あ・・・今日は軟化撮影が長くて疲れたよね？」

「うん、私も思ったよそれは」

「時間も夜ごはん時だから、どっかで食べていかない？」

「おじいちゃん、おじいちゃんか」

「そのファミレスでよくない？」

「……おじいちゃん……」

最近女になってから友達とファミレスに来ることが多くなった

だから正直に言つと・・・財布がきついな(笑)

「ねえ香菜って最近変わったよね？」

「えっ?・・・そお?・・・変わってないと思っただけだね」

「変わったよ?・・・だって普段から堂々とするよぬになったし

それに、モデルの仕事のときなんかすごく楽しそうだし

なんかすごく自分に自信がついたんじゃないモデルの仕事のおかげ  
で」

「うん?・・・でもそう言われればそうなのかもしれないね」

「香菜はかわいいし美人なんだから堂々としてないと

そのモデルのときみたいな凜とした感じを出せないよきつと」

「別に凜としてなくても普通でいいよ」笑

なんだかんだで9時を過ぎてしまった

「じゅあ悠里じゃあね  
「

「うんじゃあね香菜？  
「

「きをつけてかえれよ」(笑)  
「



「それはこっちのセリフですぅ〜」(笑)

「じゃあまた明日」

なんだかんだですごく疲れたなあ

っていつかもう女の子になって3カ月かあ

早かったなあ、本当にこの間にいろいろあったな

ナンパには遭うし、痴漢にも遭うし、モデルにはなっちゃうし

学校ではなんかファンクラブが出来るし

なんか落ち着かないし、いまもなんかストーカーに遭ってるし

リアルに空手が柔道やりたいなあ

そうすれば一発で締め上げれるのに、だけど・・・

モデルをやってるせいでそれが出来ない(泣)

もう嫌だ?・・・

なんでこんな暗い道を通ってきちゃったんだろ？

遠回りをしてでも明るい大通りを通ればよかった

もおゝ・・・わたしのバカバカア

あっそういえば悠里が私の足が速すぎるとか言ってたから

試しに走ってみるか・・・幸いなことに制服だから運動靴だし

バツ  
タツタツタツタ

うわ追いかけてきた・・・でも・・・

おっそ)笑) W W W W W W

マジ受ける足遅すぎ

「なんとかまいたか・・・さて帰ろっ」と

がちや

なんとかかまいたけど

毎回毎回こんなようなことがあってはたまらないから次は

大通りを通って行こう

そんな平日さよならを告げるように眠りに落ちていく香菜であった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2639y/>

---

なんでこんなことになった？

2011年12月11日13時46分発行